

Title	倉澤康一郎先生の思い出
Sub Title	
Author	鈴木, 千佳子(Suzuki, Chikako)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2010
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.83, No.11 (2010. 11) ,p.207- 208
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	倉澤康一郎先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20101128-0207

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

倉澤康一郎先生の思い出

目をつぶると最初に浮かんでくる倉澤先生のお姿、それは、すらりとした長身で三田のキャンパスを悠然と歩いて行かれる先生です。最後にお会いした時も、先生は現役時代と変わらさず若々しく、私はいつまでもこのまま私たちのそばにいてくださると信じて疑いませんでした。今も悲しく残念な気持ちでいっぱいですが、先生への憧憬とお礼の気持ちを込めて、先生との思い出を書きたいと思います。

先生と初めてお目にかかったときっかけについて書くためには、私の父、鈴木竹雄のことを書かなくてはなりません。私の父は、東京大学教授でやはり商法の学者でした。その父が、当時主流であった会社法の改正の検討だけでなく商法の他の分野についての検討も必要であると考えて、保険法を研究されている先生方に呼び掛けて保険法の研究会を立ち上げましたが、その中に、倉澤先生も参加していらっしやいました。研究会は、当時の東京

海上の寮で毎年七月に二泊の泊まり込みで行われていましたが、それは、父が散歩の途中自宅のそばに寮があることを知って、東京海上の担当者に頼み込んで使わせてもらっていたところでした。そのため私は、母と小学校の低学年のころから毎年のように寮にお邪魔しておりましたが、私のはっきりとした記憶は中学生の時くらいからですが、おそらく、倉澤先生は私を小学生時代からご存じであったと思います。幼稚舎から慶應で過ごしていた私は、「慶應ボーイ」という言葉を身近に思っていましたので、「さすが慶應には素敵な先生がいらっしやるものだなあ」と憧れの目で拝見しておりましたが、いつも先生は幼い私に、にこにこしながらやさしく話しかけてくださいました。それが、私と先生との出会いでした。そして、私はその後大学で法学部法律学科に入り、法律を勉強し始めた時、あらためて学者としての先生を知ることになりました。先生の授業は、手形法、保険法、そしてフランス法に至るまで、履修可能なものはすべて履修させていただきました。先生が父に対する遠慮からか、「僕の授業はとらないでね」と片目をつぶって、茶目つけたっぷりにおっしゃったにも関わらず、それほど、

先生の授業は素晴らしく、新鮮な魅力がありました。

また、大学院に進んで受講をした合同演習では、いつも先生は学生の報告が終わると真つ先に的確な質問をされました。その明晰さと頭の回転の速さにもいつも驚き、今度はどうのような質問を先生からしていただけるのかと楽しみにになりました。「鈴木君、とにかく質問が出たら、まず、よくそれを聞くこと。」「報告をするときには、質問を受けても自分の主張に自信を持ってきちんと言え、答えること、僕たちの質問はたんなる思いつきに過ぎないんだから。」など、とかく自らの知識の少なさや才能の乏しさに自信を失いがちな私にかけていただいたお言葉が、その後も折々で思い出され、私を支えてきたと思います。また、私の父が亡くなったとき、先生からお手紙をいただき、先生は、父との思い出と感謝、そして、父がいなくなった今、自分もできるだけ力になりたいということを書いてくださいました。その時には、本当に、先生のお優しさが心に染みしました。とにかく、私を幼少の時からご存じだった先生は、いつも子供を見るような眼で私に接してくださったと思っています。

先生の突然の訃報に接し、なにがなんだかわからない

ままだ夢のような気持ちで葬儀に参加し、先生をお見送りした帰り道、先生の盟友である早稲田大学の奥島孝康先生が弔辞の中でおっしゃっていた、「法律が面白くてたまらないよ」という倉澤先生の口癖について思いを馳せながら、涙が止まりませんでした。私はまだ、法律が楽しくてならないといえるほどの域には達しておらず、むしろ厳しく大変なことはかりが意識されている迷い道の途中にあります。そんな素晴らしい研究者でいらした先生から、もつともつと多くのことを学びたかったという残念な気持ちでいっぱいになりました。しかし、思い返しますと、私には、このように先生とのたくさん思い出と、学ぶべき研究者としての先生のご業績が残されています。これからはこれらを支えにして、研究にも精進してまいりたいと思っています。論文を書くたび、報告をするたび、先生ならどのような質問をしてくださるかを考え続けてゆきたいと思っています。

天国の先生に、書いても書き足りないほどの感謝の気持ちで、ここからお伝えしたいと思います。

先生、本当にありがとうございました。

法学部教授 鈴木 千佳子